

# 山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、  
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。  
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 現場では常にカメラやメモを持つ。少しでも多くの情報を集めることが記事を書く第一歩。



2 支社に戻る時間がないときは、その場で記事を書くことも。



3 何度か取材にお邪魔してもらった「走れ!! わぁのチャリ」。山形大学OBとして恥ずかしくない取材をしようと心掛けた。

## 農学部で得た知識やつながりを生かして 記者という特殊な分野に活躍の場を見いだす。

小田信博 記者

東北・北海道出身者が多い山形大学において、広島県出身という小田さんはかなりの少数派。高校時代、植物の遺伝子研究に興味を持った小田さんは、農学部を志望。全く知らない遠い土地で暮らしてみたいとの思いもあって、自然が豊かで農業も盛んな山形県を選んだ。生物資源学科(現在は食料生命環境学科1学科6コース制)で取り組んだテーマは、庄内地方独特の枝豆、だだちゃ豆の食味に関する研究。まさに山形の大学でしか取り組めないテーマに巡り合えたわけだ。さらに、4年間では遺伝子関係の研究が十分にできなかったとの思いからそのまま大学院修士課程に進学。遺伝育種学が専門の阿部利徳先生のもとで日々研究に励んだ。自分の研究はもちろん、後輩への指導や学会での発表、研究室同士で

の飲み会等、さまざまなことが経験できたこの2年間で特に充実していたと振り返る。

ちょうどその頃、山形新聞に農学部の研究室の紹介が連載され、阿部先生の研究室にも取材記者が訪れた。新聞記者の仕事は初めて間近で見えて、記者という仕事に興味を覚えた。それまでは、新聞社という文系のイメージが強かったが、掲載になった記事を読んで、理系の知識や経験を生かすこともできるのだと感じた。それをきっかけに、一見、畑違いな新聞社への就職を希望した。広島へ帰るといふ選択肢もあったが、山形新聞から内定をもらったことで山形に留まることを決意。なかなか経験できない職種だから挑戦してみたいと両親を説得したのだった。

現在は、鶴岡支社で取材から撮影、記事

の作成までを担当。事件や事故が起こればすぐに現場に駆けつけたり、警察に話を聞きに行ったり。そのほかにも展示会やイベントの取材も行う。震災直後の4月には、不用自転車を整備・修理して被災地に届ける農学部のボランティア「走れ!! わぁのチャリ」の活動を取材するために母校を訪れ、後輩たちの活躍の記事として伝えることができた。この地で記者として仕事をしていく上で山形大学とのつながりや農学部で学んだことは大きい。これからも何か頑張っている人、団体を多く紹介していきたいと希望に燃える。そのためにも、今は“この人に取材をお願いしたい”と思ってもらえるような記者を目標としている。

好奇心の成果